

青年期における自己の葛藤と家族機能との関連についての研究

— 対人恐怖の傾向・自己愛的傾向に着目して —

児玉 夏枝

I. 問題・目的

1. アイデンティティと対人恐怖傾向・自己愛傾向

Erikson, E.H. (1959) は「アイデンティティ形成は、同一化の有効性が終わるところから始まる」と述べている。同一化とは「主体が対象を模倣し、対象と同じように考え、感じ、ふるまうことを通じて、その対象を内在化する過程」(福島 2004) をいう。つまり自己と対象との葛藤を解消するための機制のことである。この同一化が終焉し、「アイデンティティの確立」という発達課題を達成しようとする青年は葛藤に直面化することとなる。その葛藤は小谷ら(1988) が挙げたように自分の希望について、あるいはその実現可能性について、親との期待の対立について、自分の性格について、恋愛について、自分の性についてなどあらゆる範囲に及ぶ。しかし個人の人生について「その思いや葛藤をもとにして、展開していく」と小谷(1998) が述べるように、葛藤することは青年のアイデンティティ確立の起点として必要不可欠である。杉村(1998) はアイデンティティ形成を「自己の視点に気づき、他者の視点を内在化しながら、そこで生じた自己と他者の間の視点の食い違いを相互調整によって解決する作業」と述べており、青年は与えられた葛藤を修復していくことでアイデンティティを確立し、さらに展開させていくことができると考えられる。

しかし葛藤は必ずしもうまく修復されていくばかりではない。特に河合(2006)の指摘するように日本人の自我の在り方は「個人の所属すると考えている集団」あるいは「場」によって支えられており、このような心性や文化的特質との関連によって対人恐怖症も起こりやすくなっていると考えられている。対人恐怖症とは、対人場面で不当に強い不安や緊張を生じ、その結果、人から嫌がられたり変に思われたりすることを恐れて、対人場面を避けようとする神経症である。対人恐怖症の発症は青年期に多く、青年期の人格発達の問題との関連が指摘されている(小川ら 1979)。谷(1997) は日本においては相互協調的自己観を前提とし、現実の自分は他者との「関係」の方に向いているが、理想としては「個」を志向しているという形の葛藤があることを指摘し、「個」としての自己の主張が「関係」の中での自己を喪失させるのではないかという懸念が「関係」に対する過剰な配慮を生み、対人恐怖心性を強めるとした。また岡野(1998) や上地・宮下(2009) も対人恐怖症者は理想化された自己に固執し、現実とのギャップが大きくなることから自分を恥ずかしいものと感じる心性があるとしている。つまり実際に

は「個」を志向する心性、つまり自己愛的心性はあるのだが、それを他者に悟られてはいけないという葛藤、自己が防備なしにむき出しにされ、周囲からの支えもなく孤立した状態(鐘 1996)が対人恐怖を引き起こすのではないかと考えられてきたのである。1960年代まではこのような対人恐怖的な状態が青年の自己の揺らぎとして現れることが多かった。

しかし1990年代ごろより、他者に傷付けられることにも敏感だが自己顕示欲求も強い「他人を過剰に気にかける過敏型」(Gabbard 1994 など)と呼ばれる青年が目立つようになってきた。彼らは「相手の心に立ち入られず」相手も傷付けない関係を保ち、また彼らは失敗を恐れ「試行はしても、錯誤は嫌い」な傾向にあり(大平 1995)、対人恐怖症者のように「個」が「場」に合わせられないのではなく「場」が「個」に合わせてくれない事に苦悩する。彼らは純粋な「対人恐怖」とは違って、葛藤を抱えられずに持っている自己愛心性をそのまま他者に向けてしまうのではないかと考えられる。

このような現代青年の「葛藤のなさ」については河合(2010)も指摘しており、河合は「葛藤や罪悪感のない、いわば『ポストモダンの意識』を目指す方向になっているのではないかと述べている。館(2008)はモダン社会とポストモダン社会を比較し青年の自己愛の変化について以下のように述べる。つまり階層が明確で秩序づけられた社会であったモダン社会から価値が多様化され枠組みははっきりしなくなったポストモダン社会に生きる中で青年は「自分は本当に何ができるのか」というアイデンティティの課題に直面化させられ、時にはそれが逆転し自分への過度な没入や根拠のない万能感により自分を支えようとして自己愛的になると考えているのである。このように社会・文化的特質の変化に伴って現代青年の揺らぎ方は葛藤を抱える対人恐怖の傾向から葛藤を抱えない自己愛の傾向へ変化している。

このように葛藤をもてないことはどのように不適応につながるのだろうか。例えば岩宮(2009)は「子どもが成長のステップを登る時」には、エネルギーの求め方は「否定的で、対立の構造をとって示され」、その為に受け入れがたいものとなるが、大人がその子どものエネルギーと「本気」で向き合うことを避け、「なかったこと」にしてしまうと子どもは内省を行うことができず、その結果衝動に乗っ取られるままに行動し、他者に悪いことの責任を押し付けるようになってしまうと述べる。また松木(2011)は「主体の原初体験における外界の現実には、外界の対象によって欲求の満足が供給される『正の現実』と、充足が得られずフラストレーションの苦痛を体験する『負の現実』がある」とし、「負の現実」が内在化されないとそれは外界に投影され、「悪い対象の幻覚」などが発生し世界が迫害的なものとして体験されてしまうという。その為「正の現実」と「負の現実」両者が回避されずに内在化されることがこの健全な生成につながるのである。葛藤を感じるとは外的な困難な体験に対して避ける事なく折り合いをつけていく中で主体性が育まれていくプロセスの第一歩である。つまり葛藤が持てないということは自身の主体性のなさが問題になる。それゆえ青年が葛藤を抱えられるかどうか、つまり対人恐怖の傾向あるいは自己愛的傾向によって彼らの自己が揺らぐのかを見ていくことはどのように青年を支えるかを考える上で意義があることだと思われる。

2. 家族機能

青年に社会、文化的特質の影響を与える一要因として「家族」が考えられる。加藤(1983)は同一性の形成の為に重要な領域の1つとして「家族との関係」がある程度関連していること

円環モデルに批判を加えている。また貞木ら（1992）も「Olson らの家族柔軟性²次元には、概念的問題の存在する可能性が考えられる」と検討の余地があることを示しており、円環モデルを用いる際には特に適応性次元に関してその扱いに注意しておく必要があると考えられる。

これまで対人恐怖や自己愛はその社会の影響について示唆されながらも実際にその関連を見た研究は少なく、十分に検討が行われているとは言い難い。そこで本研究の目的は現代青年の自己の葛藤について対人恐怖的傾向と自己愛的傾向から検討すること、社会の一要因である家族機能と対人恐怖的傾向、自己愛的傾向にどのように関連をしているのかを調べることにした。

II. 方法

1. 測定尺度と質問紙の構成

以下の測定尺度から質問紙を構成した。使用した尺度はすべて青年期である大学生、大学院生を対象として作成されたものであり、今回の調査目的に合ったものであると考えた。なお、本研究では家族に関しては特に指定せず、調査協力者個人の捉えた家族イメージに任せることとした。

（1） 家族機能測定尺度

草田・岡田（1993）により作成された家族機能測定尺度を用いた。この尺度は Olson(1985)の FACESⅢの邦訳版であり 20 項目から構成されている。また草田（1995）により妥当性と信頼性が確認されている。2 因子構造であり、「まったくない」から「いつもある」までの 5 段階評定で実施した。

（2） 対人恐怖的傾向尺度と自己愛的傾向尺度

相澤（2009）による対人恐怖的傾向尺度と自己愛的傾向尺度を用いた。この尺度は 33 項目から構成され、十分な妥当性と信頼性が確認されている。6 因子構造となっており「全然当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの 7 段階評定で実施した。

（3） 質問紙の構成

フェイスシート上に年齢、性別、家族との同居の有無を記載してもらうようにした。

2. 対象者

2013 年 10 月から 2013 年 11 月までの間に A 大学の学生（学部生、大学院生）123 名に対し質問紙調査を行った。250 部を配布し 123 部を回収し回収率は 49.2%であった。回答に記入漏れのあった 2 名のデータは除外し、結果 121 名のデータを用いて分析を行った。年齢は 18 歳から 25 歳、平均年齢 20.34 歳、標準偏差は 1.282 であり、性別の内訳は男性 75 名、女性 46 名であった。また家族との同居については別居 86 名、同居 35 名であった。

3. 手続き

質問紙は授業終了後に配布し回収した。授業後の時間に回収できないものは学内に設置した回収箱への提出を求めた。また本研究の趣旨や質問紙の管理、匿名性の確保について説明し、同意の得られる場合のみ回答するように求め、回答の途中であってもいつでも調査への参加を中断することができる旨を伝え、倫理的配慮を行った。

² 貞木（1992）の言う「家族柔軟性次元」とは「適応性」と同義である。

Ⅲ. 結果

1. 各尺度の信頼性、妥当性の検討

(1) 家族機能測定尺度の分析

凝集性については項目ごとの得点の分布状況を確認したところ、特に問題のある分布を示す項目は見られなかった。信頼性分析をおこなったところ凝集性の各項目と総得点間相関は 0.45 以上の値を示し、 α 係数は 0.88 であった。同様の手続きを適応性についても行ったところ項目と総得点間相関はおおむね 0.4 以上の値を示し α 係数は 0.65 となった。0.3 程度の相関となっていた 2 項目（「私の家族では、みんなを引っ張っていく者（リーダー）が決まっている」、「私の家族では、誰がどの家事・用事をするか決まっている」）については、全体と弱い負の相関が見られたため、今回の分析には用いなかった。その 2 項目を削除し改めて α 係数を求めたところ、0.71 となった。同様に家族機能測定尺度全体においても信頼性分析をおこなったところすべての項目－総得点間相関が 0.4 以上の値を示し、 α 係数は 0.89 であった。またこの尺度について因子分析を行ったところ、先行研究と同様に 2 因子に分かれたが項目の内容がやや異なる結果となった。項目の内容から第 1 因子を「凝集性」、第 2 因子を「適応性」として考え、今回の研究ではこの因子を採用して以降の分析を進めることとした。この因子分析の結果は表 1 にまとめた。

Olson ら（1985）は FACESⅢを用いて統計的な分析を行う際には尺度得点によって調査協力

表 1 家族機能測定尺度因子分析の結果

項目	F1	F2
第1因子 凝集性	$\alpha = .884$	
9. 私の家族では、自由な時間は、家族と一緒に過ごしている。	.809	.474
5. 私の家族は、みんなで何かをするのが好きである。	.789	.536
7. 家族の方が、他人よりもお互いに親しみを感じている。	.789	.580
11. 私の家族はお互いに密着している。	.740	.322
13. 家族で何かをする時は、みんなでやる。	.720	.607
15. 私の家族は、みんなで一緒にしたいことがすぐに思い付く。	.711	.473
1. 私の家族は、困った時、家族の誰かに助けを求める。	.673	.111
17. 私の家族では、何かを決める時、家族の誰かに相談する。	.648	.154
2. 私の家族では、問題の解決には子どもの意見も聞いている。	.640	.462
19. 家族がまとまっていることはとても大切である。	.554	.209
10. 私の家族は、叱り方について親と子で話し合う。	.510	.347
16. 私の家族では、家事・用事は、必要に応じて変わる。	.339	.207
第2因子 適応性	$\alpha = .712$	
14. 家族の決まりは、必要に応じて変わる。	.297	.707
4. 私の家族は、子どもの言い分も聞いてしつけをしている。	.542	.636
6. 家族を引っ張っていく者（リーダー）は、状況に応じて変わる。	.409	.630
12. 私の家族では、子どもが自主的に物事を決めている。	-.001	.616
8. 私の家族では、問題の性質に応じて、その取り組み方を変えている。	.500	.581
3. 家族は、それぞれの友人を気に入っている。	.336	.580
因子間相関		
F1	—	.512
F2		—

者の家族を“Balanced”、“Mid-Range”、“Extreme”の3タイプに分類することを勧め、その cutting

表 2 本研究での家族機能分類基準

家族機能尺度 (N=121)		
	<i>M</i>	<i>SD</i>
凝集性	32.84	8.731
適応性	18.06	4.168
	レンジ	%
凝集性		
遊離(N=30)	12～26	24.8
分離(N=33)	27～33	27.3
結合(N=29)	34～39	23.9
膠着(N=29)	40～60	24
適応性		
硬直(N=33)	6～15	27.3
構造化(N=28)	16～18	23.1
柔軟(N=28)	19～20	23.1
無秩序(N=32)	21～30	26.4

(男性 22 名、女性 11 名)、結合群が 29 名 (男性 18 名、女性 11 名)、膠着群が 29 名 (男性 11 名、女性 18 名) となり、適応性次元においては硬直群が 33 名 (男性 22 名、女性 11 名)、構造化群が 28 名 (男性 18 名、女性 10 名)、柔軟群が 28 名 (男性 19 名、女性 9 名)、無秩序群が 32 名 (男性 16 名、女性 16 名) となった。

(2) 対人恐ろしい傾向尺度と自己愛的傾向尺度の分析

項目ごとの得点の分布状況を確認したところ、特に問題のある分布を示す項目は見られなかった。信頼性分析をおこなったところ対人恐ろしい傾向尺度においてはすべての項目—総得点間相関が 0.5 以上の値を示し、 α 係数は .926 であった。またこの尺度に対して因子分析 (主因子法・プロマックス回転) を実施し、固有値の減衰状況と因子内容の妥当性から 3 因子が見出された。「8. 周りの人の視線が気になり、落ち着かない感じがする」についてのみ先行研究では第 1 因子にあったが、本研究においては第 3 因子にあるという点において因子構造が異なったが、先行研究とほぼ同じ 3 因子構造であったため、本研究においてもこの結果を採用し分析を行うこととした。第 1 因子ではおもに他者に嫌な思いをさせるのではないかと、他者に対して自分が劣っているのではないかと不安についての項目から成り立っており、「劣等感による不安」と命名した。第 2 因子では、他者の中での自分の主張の出来なさについての項目から成り立っており、「自己主張の出来なさ」と命名した。第 3 因子では、他者に対して自然な自分を出して付き合いたいとうまくいかないことについての項目から成り立っており「対人希求と回避の葛藤」と命名した。この結果は表 3 にまとめた。

points には各尺度とも調査協力者の上位 25%、下 25% を分離する値を適用しており、本研究でもその分類基準に習い、表 2 のように各調査協力者を各尺度について分離し、その組み合わせによって 3 群に分類を行った。各群の名称については草田・岡田 (1993) の用いる“バランス群”、“中間群”、“極端群”を採用した。この結果、バランス群は 33 名 (男性 23 名、女性 10 名)、中間群は 52 名、(男性 31 名、女性 21 名)、極端群は 36 名 (男性 21 名、女性 15 名) であった。また次元ごとにみると凝集性次元では得点の低い方から遊離群が 30 名 (男性 24 名、女性 6 名)、分離群が 33 名

表 3 対人恐怖の傾向尺度因子分析の結果

項目	F1	F2	F3
第 1 因子 劣等感による不安			
1. 自分が相手の人に嫌な感じを与えているのではないかと不安になる。	.916	$\alpha = .876$.043	-.349
5. 人といても、相手に迷惑ではないかと不安になる。	.907	-.142	.005
2. ささいなことでも批難されたりすると、ひどく動揺する。	.832	.167	-.174
4. 人といても自分だけ取り残されたような気持ちになる。	.714	-.186	.282
6. 人といると、馬鹿にされたり軽く扱われたりしないかと不安になる。	.662	-.107	.213
3. 他人のちょっとした優れた面を見て、ひどい劣等感を感じる。	.641	.009	.057
7. 自分に自信が持てない。	.515	.183	.196
第 2 因子 自己主張の出来さ			
9. 大勢の人前では、顔がこわばったり赤くなったりして緊張する。	-.093	$\alpha = .873$ 1.009	-.145
10. 大勢の人の前にいると、いつも圧倒されてしまう。	-.165	.963	-.027
13. 人と面と向かうと、相手を意識して取り乱してしまう。	.015	.667	.216
11. 自分の意見が正しいと思っても強く主張できない。	.236	.605	.037
12. 自分は気が弱いと思う。	.168	.541	.182
第 3 因子 対人希求と回避の葛藤			
14. 人と心から打ち解けて付き合うことができない。	-.178	-.042	1.017
15. 人と自然につき合えない。	.021	-.044	.925
16. 人に近づきたい気持ちがあるのに、いつも人を避けてしまう。	.006	.130	.780
8. 周りの人の視線が気になり、落ち着かない感じがする。	.235	.326	.348
因子間相関			
F1	—	.537	.564
F2		—	.573
F3			—

また自己愛的傾向尺度についても同様の手続きで分析を行った。すべての項目-総得点相関は 0.3 以上を示し、 α 係数は.763 であり、先行研究と同じ 3 因子を見出した。第 1 因子では自分の有能さについての項目で成り立っており、「自己の有能さへの自信」と命名した。第 2 因子では他者を利用し自分の思うように動かしたいという権威的な意識についての項目から成り立ち、「優越性、特別性」と命名した。第 3 因子では不当な評価による怒りや優れている他者への嫉妬についての項目から成り立っており、「誇大的自己の空想」と命名した。この結果に関しては表 4 にまとめた。

表 4 自己愛的傾向尺度因子分析の結果

項目	F1	F2	F3
第 1 因子 自己の有能さへの自信			
17. 自分は将来成功する人間であると思う。	.825	$\alpha = .824$ -.060	.027
18. 自分にはどこか人を魅了するところがあるようだ。	.813	.028	-.072
19. 自分には、もって生まれた素晴らしい才能がある。	.775	-.025	.105
21. 自分は要領もいいし、賢明さもかねそなえていると思う。	.745	-.011	.050
20. たいていの人は、私の話を喜んで聞いてくれるようだ。	.713	-.021	-.137
22. これまでの自分の思いどおりのやり方で、何事もうまくやってきた。	.495	.108	.019
第 2 因子 優越性、特別性			
33. 自分は今よりももっと高い地位や知性の人と接するべきだ。	.141	$\alpha = .747$.747	-.101
29. 自分の役に立つかどうかで友人を選ぶことは正当なことである。	-.030	.733	-.195
31. 私の考えに周りの人を従わせることができれば、もっとうまく物事が進むのと思う。	-.010	.717	.132
28. 人の話に耳を傾けるよりも、自分のことをもっと話したい。	-.002	.628	.047
30. 人々を従わせることができるような権威を持ちたい。	-.120	.596	.261
32. 必要ならば、あまり気がねなく、人を利用することができる。	-.020	.561	-.156
第 3 因子 誇大的自己の空想			
23. 人に侮辱されたり蔑まれたりすると、怒りをおさえられなくなる。	-.057	$\alpha = .744$.008	.787
25. 何かにつけ自分より優れている人には嫉妬を感じる。	-.012	-.108	.765
24. 人から不当な評価を受けることに我慢がならない。	-.017	-.082	.754
26. 人の賞賛をえたいという気持ちが強い。	.074	-.034	.694
27. ときどき自分が偉大な人間になっているような空想をする。	.107	.303	.470
因子間相関			
F1	—	.110	.070
F2		—	.197
F3			—

2. 各尺度の関連についての分析

(1) 対人恐怖的傾向尺度と自己愛的傾向尺度との関係

結果は以下の表5の通りであり、対人恐怖の傾向尺度と自己愛的傾向尺度の総得点との間に有意な相関は見られなかった。しかし対人恐怖の傾向尺度総得点と自己愛的傾向尺度の「自己の有能さへの自信」の間に有意な負の相関 ($r=-.365$ $p<0.001$)、「誇大的自己の空想」との間に有意な正の相関 ($r=.264$ $p<0.01$) が見られた。さらに下位尺度について見ると対人恐怖の傾向尺度の「劣等感による不安」と自己愛的傾向尺度の「自己の有能さへの自信」の間に有意な負の相関 ($r=-.427$ $p<0.001$)、「誇大的自己の空想」との間に有意な正の相関 ($r=.331$ $p<0.001$) が見られた。対人恐怖の傾向尺度の「自己主張の出来なさ」と自己愛的傾向尺度の「自己の有能さへの自信」との間に有意な負の相関 ($r=-.218$ $p<0.05$) が見られた。また対人恐怖症の傾向尺度の「対人希求の回避と葛藤」においては自己愛的傾向尺度の「自己の有能さへの自信」と「誇大的自己の空想」との間にそれぞれ有意な正の相関が見られた ($r=.331$ $p<0.001$ 、 $r=.192$ $p<0.05$)。

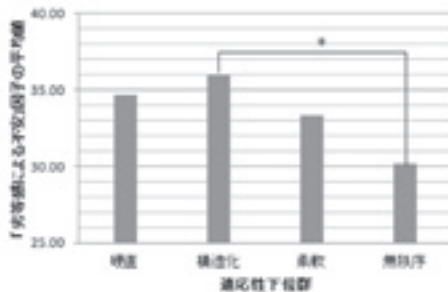
表5 対人恐怖の傾向尺度と自己愛的傾向尺度の相関

対人恐怖症の傾向	自己愛的傾向尺度			
	Total	F1	F2	F3
Total	-.041	-.365 ***	.121	.264 **
F1	-.052	-.427 ***	.030	.331 ***
F2	-.057	-.218 *	-.017	.139
F3	.015	-.276 **	.132	.192 *

***: $p<0.001$ **: $p<0.01$ *: $p<0.05$

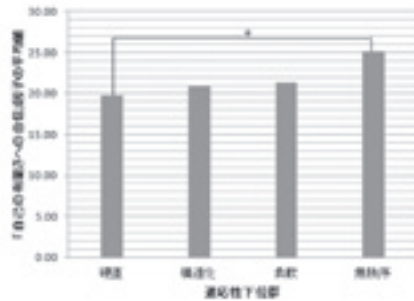
(2) 家族機能と対人恐怖の傾向尺度、自己愛的傾向尺度の関係

家族機能各群と対人恐怖の傾向尺度得点、自己愛的傾向尺度得点において分析を行ったがこれらの間に有意な差は見られなかった。また次元ごとの比較を行ったが、凝集性と対人恐怖の傾向尺度得点と自己愛的傾向尺度得点との間に有意な差は見られなかった。一方適応性について下位群で多重比較を行ったところ、対人恐怖の傾向尺度の「劣等感による不安」因子において、適応性が2番目に低い構造化群が適応性の最も高い無秩序群よりも有意に得点が高いことが明らかとなった ($p<0.05$)。この結果は図2にまとめた。また自己愛的傾向尺度の「自己の有能さへの自信」についても硬直群の方が無秩序群よりも有意に得点が低いことが明らかとなった ($p<0.05$)。この結果は図3に示した。



*: $p<0.05$

図2 適応性下位群ごとの「劣等感による不安」因子の平均値の多重比較結果



* : $p<0.05$

図3 適応性下位群の「自己の有能さへの自信」因子の平均値の多重比較結果

IV. 考察

1. 対人恐怖的傾向尺度と自己愛的傾向尺度について

本研究では現代青年の自己の揺らぎについて対人恐怖の傾向と自己愛的傾向の側面から検討した。今回の調査では自己愛的傾向尺度の「自己の有能さへの自信」因子は対人恐怖の傾向尺度の「劣等感による不安」因子、「自己主張の出来なさ」因子、「対人希求と回避の葛藤」因子の3因子すべてにおいて負の相関が見られた。つまり「自己の有能さへの自信」が高い青年は他者に対して自分に劣等感を感じることも少なく、自分の意見を主張することにためらうこともあまりなく、対人関係場面で他者と付き合うことに難しさも感じていない。このことから「自己の有能さへの自信」因子は自己愛の中でも相澤(2003)のいう「誇大型」や Gabbard (1994)の指摘した「他人をまったく気につけない無関心型」の傾向に相当するものではないかと思われる。この傾向は従来から言われている自己愛(誇大型自己愛)の傾向であり、誇大性や自己顕示性、他者への無関心さが特徴とされる。

一方で「誇大的自己の空想」因子と「劣等感による不安」因子には正の相関が見られている。このことから自分に劣等感を感じている青年は表には出さないが自己愛は持っており、それを表に出したい気持ちはあるが他者に傷つけられることを非常に恐れ、空想に留まっているのではないかと思われる。またそのような自分を出すことによって他者に影響を与えてしまうことそのものへの不安から自分を出せずに内にとどめてしまうのではないか、つまり自分が他者に影響を与えると考えていること自体も自己愛的なものではないかと思われる。また「誇大的自己への空想」因子と「対人希求と回避の葛藤」因子とは正の相関が見られ、他者と関わりが持たれたいがそのことによって自己愛が傷つくことを恐れ、他者を回避してしまう現代青年のあり方を示しているのではないだろうか。これらは相澤(2003)の「過敏型」、Gabbard(1994)の言う「他人を過剰に気につける過敏型」に相当するものではないかと考えられる。

以上より葛藤を抱えず誇大的に自己を表出することで自分を支える青年と葛藤を抱えながら自己を表出しないことで自分を支える青年の2つの在り方が見られることが明らかになった。

2. 家族機能測定尺度と対人恐怖的傾向尺度・自己愛的傾向尺度について

家族機能各群と対人恐怖の傾向尺度得点、自己愛的傾向尺度得点との間に有意な差は見られなかったが、次元ごとの比較においては対人恐怖の傾向尺度の「劣等感による不安」因子得点

において適応性の下位群同士の比較を行ったところ、構造化群の方が無秩序群よりも有意に得点が高いという結果が得られた。ここで適応性の項目について再度確認すると役割を「必要に応じて変える」、「話し合う」などの手段を取り、「家族に状況的危機や発達の危機が生じた場合に家族システムの勢力構造や役割関係などを変化させる能力のこと」となっている。このような適応性が低すぎると家族は問題に対して柔軟に対応できなくなり、一方で適応性が高すぎると家族は家族としてまとまりをもって行動することができず、個々人でばらばらな行動をとることになる。

構造化群は Olson の考え方に基づけば、適応性の面においてよく機能している群である。家族という集団を維持し、なおかつ適切な行動をとるためには家族成員がお互いに相手のことを敏感に察して行動する必要がある。その為、対人場面において自分の影響を気にしつつ不安に思う心性が構造化群に強く表れるのではないだろうか。

一方で無秩序群は個人がそれぞれに判断・行動を行っていく傾向の強い群であると考えられ、あまり他者を気にしないため他者と自分を比較して不安に思うことは少ないのではないか。この傾向は無秩序群が硬直群よりも自己愛的傾向尺度の「自己の有能さへの自信」について有意に得点が高いことから示されている。「自己の有能さへの自信」因子は自分には「才能」があり、「人を魅了するところがある」というような他者へのポジティブな影響を自覚している状態を示す項目からなる。無秩序群の青年は、家族という支えを持たないまま自己に直面化させられた結果、揺らぐ自分を支えるためにこのような誇大的な自己意識を持つことになるのではないだろうか。また「劣等感による不安」については硬直群と柔軟群が平均値において同じ程度の値を示している。これは柔軟群では家族の支えを感じつつある程度自由に行動することも許されることについての安心感、硬直群では自分の責任において判断せず家族に頼り、任せておける安心感が働いた結果ではないかと思われるが、その違いについては今後慎重に検討する必要があるだろう。このように家族機能の適応性下位群の比較において適応性の高すぎる無秩序群は葛藤しない誇大的な自己の在り方であること、適応性の低い硬直群や構造化群は対人恐怖的傾向あるいは過敏型自己愛の傾向のような葛藤の状態にあることが示唆された。

V. 総合考察

本研究では、円環モデルに基づくと機能がうまく働いていないとされる点では共通している、適応性次元の両極に位置する無秩序群と硬直群の間で青年の自己愛の表現のされ方が異なることが明らかとなった。これらの群はどちらも円環図に基づくと機能がうまく働いていないとされるものである。しかし無秩序群では葛藤のない誇大的な自己愛の在り方であること、硬直群では対人恐怖的あるいは過敏型自己愛の傾向のような葛藤的な在り方であることが明らかとなった。家族機能がうまく働いていない家族は大越（1996）が挙げるとような様々な要因をまとめて「機能不全家族」という概念を用いて表現されることがあるが、臨床家はそのようなラベルを貼って満足するのではなく、その家族機能の不全がどのような点にあるのかを丁寧に見立てることが求められる。このような家族など青年を取り囲む環境についての丁寧な見立てが青年の「自己愛」の在り方を知り、理解するための一つの大きなきっかけとなりうることを本研究は示唆している。しかし本研究では対人恐

怖的心性や自己愛的心性など自己の偏りを単に青年の自己の脆弱性として見るのではなく、彼らの自己を支える力として捉えている。例え原家族が「機能不全家族」であっても青年は成長していく過程で自己を支える在り方を身に付け、社会の中で生きていくことができる。臨床家は過去の家族に問題の原因を見出し、追求するのではなく、現代の青年の様相に注視しつつそれを支えていくことが必要とされると考えられる。

VI. 今後の課題

本研究では家族機能を円環モデルとして捉えることが出来なかった。これは先行研究で言われてきた通りではあるが、本研究では自己愛的傾向に対して、凝集性次元においては有意な結果が得られず、適応性次元ではカーブリーニアな結果が得られた点で異なる。これまでの先行研究では適応性次元に関して概念的の問題などが挙げられてきたが、今回の結果を見ると適応性次元の測定できる領域が凝集性次元とは異なる可能性が考えられ、今後も検討していく必要があると思われた。また家族としての課題と青年期課題との区別が十分でなかったことが挙げられる。これに関しては別の世代の協力者を集い、比較検討する必要があると思われる。また家族をもっと力動的なものとして捉える視点が必要であろう。さらに対象者に関する課題を挙げると、まずサンプル数の拡大が指摘される。本研究では一部大学の大学生・大学院生のみを対象に調査を行ったため、この結果を過度に一般化することはできない。青年期についての理解を深めるためにはより多くのサンプル、かつ勤労青年など対象にした調査も必要であると思われる。また本研究の知見は非臨床群を対象として得られたものであり、臨床群に関しては異なる結果が得られる可能性もあるため、今後の検討を要する。

文献

相澤直樹（2003）青年期自己愛的人格における誇大特性と過敏特性の関係について-相関分析、クラスター分析、文章完成法を用いた補足的研究 - 神戸大学発達科学部研究紀要,11（1）pp.147.-159.

相澤直樹（2009）青年期における対人恐怖症傾向と自己愛的傾向を測定する短縮版尺度作成の試み 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,3(1) pp.1-9.

Carnes,P.J.（1987）Counseling sexual abusers. Mineapolis;CompCare Publications.

Clark,J.（1984）The family types of schizophrenics, neurotics and normal Family social science, University of Minnesota.

Erikson,E.H.（1959）Psychological Issues: Identity and the Life Cycle International Universities Press.

（小此木啓吾訳編 1973 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル—誠信書房）

福島京子（2004）同一視（同一化） 山中康裕・東山紘久・成田善弘・亀口憲治・氏原寛共編 心理臨床大事典 培風館 pp1059-1060.

Gabbard,G.O.(1994) Psychodynamic psychiatry in clinical practice:The DSM- IV Edition. Washington:American Psychiatric Press

Green,R.G., Harris,R.N.,Forte,J.A.,&Robinson,M.（1991）Evaluating FACE III and the Circumplex Model:2,440families. *Family Process*, 30 pp55-73.

- 岩宮恵子 (2009) フツウの子の思春期 心理療法の現場から 岩波書店
- 加藤厚 (1983) 大学生における同一性のその諸相とその構造 教育心理学研究,31(4) pp.292.-302.
- 上地雄一郎・宮下一博(2005)コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成 パーソナリティ研究,14 pp.89-91.
- 河合隼雄・谷川俊太郎・山田太一 (2000) 家族はどこへ行くのか 岩波書店
- 河合俊雄編 (2010) 発達障害への心理療法的アプローチ 創元社
- 草田寿子・岡堂哲雄 (1993) 家族関係査定法 岡堂哲雄 (編) 心理検査学 垣内出版 pp. 573 - 581.
- 草田寿子 (1995) 日本語版 FACESⅢの信頼性と妥当性の検討 カウンセリング研究,28(2) pp.24-32.
- 松木邦裕 (2011) 不在論 根源的苦痛の精神分析 創元社
- 西園昌久 (1996) 日本文化と神経症 日本語臨床 1 恥 北山修 (編) 星和書店 pp3-24.
- 岡堂哲雄 (1991) 家族心理学講義 金子書房
- 小川捷之,林洋一,永井徹,白石秀人(1979)対人恐怖症者に認められる対人不安意識に関する研究 (1): 比較文化的観点から 横浜国立大学教育紀要 19, pp.205-220.
- 岡野憲一郎 (1993) 恥と自己愛の精神分析 岩波学術出版社
- Olson,D.H., Sprenkle,D.H.. &Russell,C.S.(1979)Circumplex Model of marital and family systems I :Cohesion and adaptability dimensions, familytypes, and clinical applications. *Family Process*, 18, pp3-28
- Olson,D.H.,McCabbin,H.I.,Larsen,A.,Muxen,M.,&Wilson,M. (1985) Family Inventories.St.Paul, MN:Family Social Science, University of Minnesota.
- 大平健 (1995) やさしさの精神病理 岩波新書
- 小沢一仁・高木英明 (1988) 追跡面接による青年期の同一性達成過程における葛藤の焦点 横浜国立大学保健管理センター年報 8
- 小沢一仁 (1998) 青年期のアイデンティティにまつわる問題の起点 東京工芸大学工学部紀要,21 (2) pp.18-28
- 杉村和美 (1998) 青年期におけるアイデンティティの形成:関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究,9 (1) ,pp.45.-55.
- 鐘幹八郎 (1996) 恥の感覚について 日本語臨床 1 恥 北山修 (編) 星和書店 pp25-40.
- 館直彦 (2008) 青年期の自己愛とその病理—ポストモダン社会における錯覚の機能不全— 思春期青年期精神医学,18 (1) ,pp.1-11.
- 谷冬彦 (1997). 青年期における自我同一性と対人恐怖心性 教育心理学研究,45, pp254 - 262.
- 詫摩武俊・依田明 (1972) 家族心理学 川島書店
- 渡辺さちや (1989) 家族機能と自我同一性のかかわり—青年期の自立をめぐって— 家族心理学研究,3(2)

(臨床心理実践学講座 博士後期課程 2 回生)

(受稿 2015 年 9 月 1 日、改稿 2015 年 11 月 4 日、受理 2015 年 12 月 24 日)

青年期における自己の葛藤と家族機能との関連についての研究

—対人恐怖的傾向・自己愛的傾向に着目して—

児玉 夏枝

本論文は現代青年の自己の葛藤について対人恐怖的傾向と自己愛的傾向についての二側面から検討し、さらに家族機能と対人恐怖的傾向、自己愛的傾向にどのような関連が見られるか調査を行った。その結果、葛藤を抱えず誇大的に自己愛を表出することで誇大型自己愛と葛藤を抱えながら自己を表出しないことで自分を支える過敏型自己愛との2つの在り方が青年に見られることが明らかとなった。また家族機能との関連では家族に危機が生じた際に家族システムの構造や役割を変化させる「適応性」の次元において適応性が極端に高い家族の青年は誇大的自己愛の傾向が強く、また適応性が極端に低い家族の青年は過敏型自己愛の傾向が強いことがうかがわれた。これらの自己愛の表出の違いは青年が問題のある家族や社会の中で自己を支えるための方略であると考えられ、臨床家はそのような現在の青年の様相に注視しつつ、共に支えていくことが有用であることが示された。

Relation between discord in adolescence and family function

KODAMA Natsue

This report discusses discord in adolescence from the perspective of tendencies of *taijin kyofusho* symptoms (TKS) and narcissism, and verifies the relation between family functions and TKS/narcissism tendencies. The result two types of narcissism, i.e., the obvious type and hypervigilant type in adolescence. Only the later is associated with discord. Next, we clarified “family adaptability”, which involves changes in the structure and role of the family system in the event of a crisis in relation to narcissism in adolescence. When “family adaptability” is extremely high, young men may develop or exhibit oblivious type narcissism tendency, while narcissism of hypervigilance type may occur when “family adaptability” is extremely low. We consider that these differences in expression of narcissism represent means of supporting themselves in problems with family or society. This result will be beneficial for clinical psychologists and therapists involved in the support.

キーワード： 青年期、家族機能、自己愛

Keywords: Adolescence, Family function, Narcissism